

## 奄美のうた文化とラジオ

麓憲吾

### Radio and the Singing Culture of Amami Oshima

FUMOTO Kengo

NPO 法人ディ代表理事

*Representative Director of Specified Nonprofit Corporation D!*

#### 要旨

「あまみFM」は2017年に開局10周年を迎えた。最初に開局に至るまでの歩みを、1990年代からの奄美のポピュラー音楽の状況と絡めながら概観したのち、開局後の10年間に見られた地元の文化や音楽環境におけるさまざまな変化に注目しながら、街と集落によって成り立つ奄美大島のうた文化におけるラジオの役割について考察した。

#### 報告

うがみんしょ〜ら。屋仁川の方でASIVIというライブハウスと「あまみFM」をやっております麓と申します。きょうは私がこれまで携わってきたイベントやラジオや歌などについてお伝えしたいと思います。実はいまさっき東京の出張から帰って来たばかりで、その移動中にばたばたとまとめた報告ですので、もしかしたら主観的すぎたり、偏見なども混ざっていたりするかもしれませんが、皆さんにお話しさせていただきたいと思います。

「あまみFM」は今年の5月で開局10周年を迎えることができました。小川学夫先生、指宿会長をはじめ、唄者の皆さん、地元のリスナーの皆さんに支えられながら、なんとか10年という節目の時を迎えることができました。この10年で歌を取り巻く環境もいろいろと変化してきました。ここでそれをちょっと振り返ってみたいと思います。島唄のことは真吾くんが伝えてくれるでしょうから、私の方はポップスを中心にお話ししたいと思います。

この10年、いろいろなことがございました(図1)。まず1990年代からの奄美のポップスの歩みを見ていきたいと思います。最初に柳屋クインテットさん。のちにVOX-4などで活躍しましたけれども。あと、平田輝さんですね。それから、リッキちゃん、我那覇美奈ちゃん、その98年に屋仁川通り街にASIVIができました。サーモン&ガーリックも活動を開始します。ちとせちゃんがデビューして、朝崎さんもデビューしましたけれども、スパークリングポイントというアイドルグループも登場しました。きょう来てくださっている里アンナさんもリリースし、孝介くんたちも地元で自主制作、インディーズ盤をつくって、それからメジャーデビュー。2007年には「あまみFM」が開局していくわけです。その後は、城南海ちゃんですね。あと、カサリンチュもデビューしてきました。



図 1

そんななかで、奄美の音楽シーンにとっての歴史的出来事が、2002年2月に刻まれます。元ちとせちゃんのデビューですね。彼女のすごいところは、芸能界や音楽シーンにいる人はふつうなかなか地方出身であるということを語らないのに、彼女の場合は自らテレビやラジオで「奄美出身の元ちとせです」と語ったことです。そして島唄の歌詞をもとにしたポップスを歌って、「ワダツミの木」という曲でデビューしました。彼女の歌はラジオを中心にヘビーローテーションされて、だんだんとチャートをのぼりつめて、最終的にはオリコンチャート1位を取るようになりました。86万枚もセールスしたそうです。

この「元ちとせ」、そして「奄美大島」というあまり聞き慣れない固有名詞が、86万人の人たちに具体的に伝わったということは、もっと評価されているのではないのでしょうか。たんに歌がヒットしたというばかりではありません。彼女の存在は、それまで離島出身ということで多少なりとも劣等感を抱きながら内地で暮らしていた奄美出身者や、また地元の人たちにも、逆にシマッチュであることの優位性のようなものを感じさせてくれました。

それ以来、奄美出身のアーティストで活躍する人が次々と出て来て、マスメディアもどんどん奄美のことを取り上げるようになります。いまやテレビで奄美が出ない月はないほどです。その一方で、地元の私たちは、ちとせちゃんがデビューする前から島にいたのに、島の文化の素晴らしさというものになかなか気づかなかったのです。とくにぼくなんかは名瀬の生まれで、街っ子ですから、なかなかシマの文化などに関わることはなかったのですが、一度島を出て戻ってきたら、初めて足下にこんなに素晴らしい文化があるんだということに気づいたわけです。そこで「島はおもしろい、かっこいい、楽しい」ということを、直接若

年層に伝えなければと思って、サーモン&ガーリックの新元一文と一緒に、「夜ネヤ島ンチュリスpekチュ」というイベントを始めました（図2）。



図2

自分と年代の唄者さんもたくさんいるのに、若い人はあまり島唄を聴かず、聴いているのは先輩たちばかりという状態で、このままでは次の世代に聴き手がなくなるのではという危機感があったわけです。実際に日本全国を見ても、そうした伝統文化の価値をそのコンテンツ、つまり歌だけで継承しているところでは、すでにそういう事態は起きているのですね。ただ、島では生活の中に文化が溶けこんでいるので、まだ遅すぎるということはないと思ったのです。それで、まずは歌を聴く場、関心を持つ場をつくらうということで、そういうイベントを始めました。

こういったイベントをASIVIでも行いましたし、島内の大きなところでもやりました。島外でもやりました。出身者を中心にですけれどね。ただ、そのうちイベントの限界というものすごく感じるようになりました。イベントというのは非日常的なことなので、お祭りの瞬間の形成というか、出来事は刻まれるんですけども、そこから皆さんの気持ちが変わって、何か価値観が変化するというところまでには、なかなか至らないんですね。アクションやパフォーマンスとかはステージで伝えられるんですが、それが自分たちの文化を高めるという意味での島興しにはなかなかならないんです。その場だけという感じですね。そういった限界を少し感じるようになって、それでは皆さんに日常的に何かを届けながら、島というものに対して再認識を促すというか、意識が高まる場がないだろうかということで、ラジオというメディアに着目したわけです。

非日常的なイベントというものは直接的には伝わるんです。実際、きょうもそうですけども、皆さんも意識があって、話を聞きたいと思ってここにいらしているわけですよね。そういう成り立ちがあると、たしかに意識は深堀りされていくのですが、なかなかその後のアクションには結びつきづらい。それがラジオであれば、間接的ではあるのですが、日常的かつ長期的に、そして興味のない人にも届けられて、そうした無意識を感化していける可能性があるのではないかと思うようになりました（図3）。



## 伝達構図



伝達手段	伝達機会	伝達方法	伝達期間	伝達対象	伝達感化	伝達効果
イベント	非日常	直接的	短期的	能動	意識感化	▲
ラジオ	日常	間接的	長期的	受動	無意識感化	◎

図3

それで「島にラジオをつくろう」ということになりました。いろいろ調べていると、「コミュニティFM」という制度があることを知りました。皆さんの身近にはMBCさんとか、NHKさんとかのラジオがありますが、あれは鹿児島全域をカバーするラジオ局です。私は奄美大島に奄美のFMをつくろうというビジョンだったのですが、コミュニティFMという制度を調べると、各市町村に一局ということだったので、私たちは奄美市のための「あまみFM」という位置づけで、開局準備を進めることになりました。

そうしながらですね、これは92年に制度化されたのですが、市町村の一部においてのFM局、地域密着型、住民参加のラジオということで、私たちは長浜の送信技術の会社である「奄美通信システム」さんの強力なバックアップのもと、10年前に開局することができました。

そこで見てみたいのが、ラジオと歌、とくにメジャーな方々との関わり合いなんですが、代表者として元ちとせちゃんと中孝介くん、そしてカサリンチュを並べてみました。まず、ちとせちゃんは地元で島唄を歌っているながら、向こうに連れて行かれてしまったと言います

か、行ってですね(笑)。なんか、歌なまはげがいるらしいんですよ。「歌のうまい子はいないか〜〜」と連れて行く人たちが。というわけで、彼女は向こうのプロダクションに入り、そこでブラッシュアップされて磨かれて、私たちはテレビで彼女と出会ったわけです。つまり、一種の逆輸入ですよ。

その当時、私が感じたことですが、つい昨日まで地元で島唄を唄っていた子が、そういう風にマスメディアに出ている、テレビに出ているということは、とても誇らしいんですけども、その一方で何か違和感を持ったのです。要するに、なぜ地元でこういった彼女たちの歩みにいい形でサポートできないかということなんです。その違和感が起点となって、ラジオの開局も目指すようになるんですけど。

中孝介くんの場合のメジャーへのアプローチというのは、ライブハウス ASIVI での活動もしながら、各地域のお祭りで唄ったり、いろいろなところに出たりしながら、メジャーになる前に地元でインディーズCDをつくることができました。ところが、そうしてつくったのはいいのですが、音媒体がないので、なかなか皆さんに歌を届けることが出来なかったんですね。実はこのときに、ラジオ局開局を目指していたのですが、思った以上に時間がかかってしまい、間に合いませんでした。結局、彼の歌はマスメディアを通してしか聞くことができませんでした。



## メジャーデビューまでの 地元音楽環境



アーティスト名	ライブ	インディーズCD	地元への伝達メディア
元ちとせ	▲	オーガスタレコーズ 内地	マスメディア
中孝介	ASIVI	ディ！レコーズ 島	マスメディア
カサリンチュ	ASIVI	ディ！レコーズ 島	あまみエフエム

図4

その後が続くのがカサリンチュです。彼らは高校生のときは ASIVI でロックバンドをやりながら過ごしていたんです。実は前山真吾くんもそうなんですけど。それが島に帰ってきて、また二人で一緒に活動して、地元で自主制作のCDをつくりました。このときによく、

「あまみFM」がハブローテーションしたわけです。あのヘビーローテーションのもじりです。これ、笑うところですけど（笑）。いきなりショートカットして内地でデビューしてドーンとなるのではなくて、ハブローテーションして、皆の耳になじませながらですね、段階を踏んで、私たちが彼らの歩みに加担して、サポートして、ようやく島にいながら、仕事をしながらメジャーデビューできる。そういうことを実証したのが彼らだったのです。それまでは、いろんな活躍や飛躍は島の外にしかないと思われていたのですが、そういうシマンチュの思い込みを覆えて、島のなかにも夢と可能性があるということを示すことができたわけです（図4）。

すぐそばの、赤木名集落にいる兄ちゃんが、テレビに出たり、ラジオで話したりするわけですから、子供たちにとってもすごく夢のある出来事だったのではないのでしょうか。ラジオのおかげで、そういう出来事も刻むことができました。

そうこうするうちに、メジャーの歌手だけではなく、島で音楽活動をしている人が自分で歌をつくるようになってきたんですね。ASIVI ができて 19 年になるんですけども、それ以前はやはり内地への憧れがあって、内地で活躍するミュージシャンのコピーをやるバンドばかりだったんですが、だんだんとバンドやミュージシャンで、自分で曲をつくる人が増えてきて、いまは 8 割くらいがそういったバンドで、さかんにイベントやライブが行われているところなんです。

本当に大島の中には仕事をしながら音楽活動をしている人がたくさんいます。そういうところが島らしいと思うんですけど。唄者もそうですけど、島には歌を生業としないのを美德とする風潮があるんですね。もともと歌というのはそういうものだと思うのですが、仕事をしながら慰みのために歌を歌って、そうしながら地域の仲間たちと共感するというスタイルがぼくは好きで、これが音楽文化が続いていくひとつの秘訣なんじゃないかなと思うんです。もちろんメジャーが駄目というわけではないですよ。それも選択肢のひとつとしてあるべきなんですけど、それだけではないというところが、バランスよく保たれていったらいいんじゃないかなと思っていて、自分ではそれを勝手に「奄チュアリズム」と呼んでおります。そういう、沖縄とは違ったスタイルで、奄美らしさみたいなものを生んでいけるんじゃないかなと思っています。指宿会長もアンチ沖縄かもしれませんが。

そういうふうには、ラジオが開局してから、いろいろな音楽的な変化が生まれて来たんですが、ことばもそうですね。「あまみFM」の開局以前は、いろいろなお堅い集まりで、「うがみんしょうらん」で始まる挨拶というのはあまりなかったのですが、それがいまではけっこう頻繁に見られるようになったり、いま町に貼ってある掲示物の中にも島口がどんどん増えてきたりと、そういう変化が起こっている気がします。まあ、これは必ずしもうちが開局したからというわけではないかもしれませんが、そういう気分が醸成されているような気がします。学校教育の中でも、小学校などの掃除の時間、運動会などで、出身者の音楽がだんだんととり入れられていますけど、こういうこともラジオができる前はそんなになかったような気がします。そういう変化がだんだん出てきて、文化の地産地消のような感じになってきている。それをどんどん濃くしていきたいなと思っております。

そういった掲示物の中で最近関わらせていただいたのが、黒糖焼酎PRのポスターです。島では酒のことをセイといいますけど、「酒酒酒～の酔酔酔」というのを、先々週つくらせていただきました。島の中ですら、こういう楽しいことをいっぱいクリエイティブにつくっていきたいと思っています（図5）。



図5

島には歌や歌い手さんが存在するわけですが、その歌を伝える役目として、CD制作やイベントごとを行っていくのですが、私たち「あまみFM」が伝えたいのは、歌だけではないんですね。まあ、名瀬なんかもそうなんですけど、最初から歌い手とお客さんという風に二元的に分かれた成立の仕方というのももちろん大事なんですけど、私がそれ以上に重要だと思うのは、メジャーになってメディアに出るまでの環境を整えていくというか、その過程を伝えることなんじゃないかなと思うんです。だからその歌い手や唄者を育む土壌、そういう人たちが生まれるまでの集落とのつながりというか、あり方みたいなものを考えて行かないといけないんじゃないかなと思います。

大島には、一方に名瀬という都会があり、もう一方に集落というものが存在しますので、すごく比較しやすいなと思います。まあ、この二つはきっちり区別されているわけではないんですけども、島の文化というのはこの両方が相俟って存在していると思います。ぼくなんかは、小さい頃からシマ文化に関わって生きてきたことがないので、今から集落に住んで、集落の行事をさばくことが自分の役目ではないだろうと思います。自分は逆に伝える役割だな、と。ぼくのようにメディアに関わる人たちは、利益社会側の立場であるからこそ、そういうものの大切さを客観的に見られるし、伝えられるということにもなると思うんです。

一方、共同社会である集落では、八月踊りなんかは、踊る人とお客さんという構図ではないですね(図6)。これは以前の島唄もそうだったかもしれませんが、内と外がないというか、一元的なあり方をしていると思うんです。だから、踊りがバラバラだったりするんですけど、しかし形よりは思いとか考えとか気持ちがひとつであるということの方が大事で、そ

これは内地のような芸術文化的なクオリティのあり方とは違うんじゃないかなと思っています。だから、私たちは歌だけではなくて、こういう集落のあり方とか育まれ方、関係性というものを、アイデンティティも含めてですけど、そういうことを伝えるのが、私たちのイベントだったり、ラジオ放送だったりするのではないかなと思っています。つまり、歌手だけが主人公ではなくて、その地域の人々も主人公で、この人たちがいるからこそ、こういう子供たちが生まれてくる、育ってくるということを伝えたいなど、日々構想を練っているところです。

## 文化の育ちと放ち

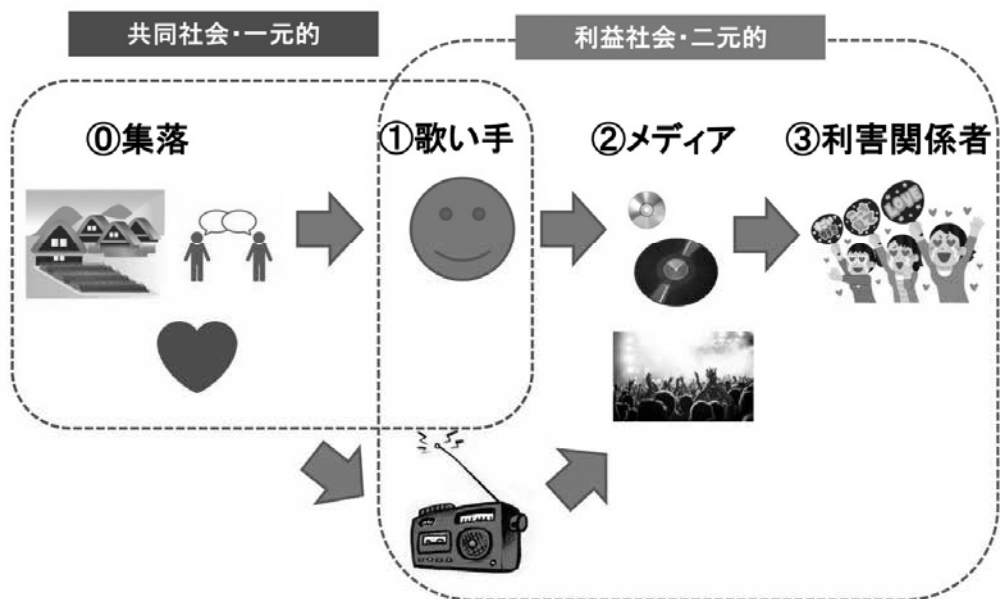


図6

それで、出張で移動しながらいろいろ考えてみたんですが、私たちが言う「文化」って何なんだろうとたまに思うことがあります(図7)。はっきり分けることはできないと思いますが、集落の文化というのは、みんなで集落サバクリをしたり、掃除をしたり、みんなでやるというときはやるという、そういう横つながりで育まれる文化です。それに対して、都会の文化というのは、「あなたは歌だけ歌っていていい」、「スポーツだけやっていていい」と、何屋さん、何屋さんと同業されている形です。こうすれば、歌でもスポーツでも何でもクオリティが上がるのは当たり前です。それを専門的にやっているわけですから。そういうエンターテインメント性の高い芸術文化と私たちが関わっている伝統文化というのは、ちょっと違うんじゃないかなという風に思います。

伝統文化でも歌舞伎のような形での伝統文化もあるんですけども、島の伝統文化はちょっと違うんじゃないかなという風に思います。おそらく集落の八月踊りがピシャッと振付が一緒だったら、気持ち悪いですよ。八月踊りにそこまで求めなくてもいいと思います。



いろんな方々と話しているときに、とくに内地にいるときには、その芸術文化から見る伝統文化というかですね、そういった求められ方をするときがよくあるので、ここは頭の中を整理しておきたい。そうでないと、下手をすると「よさこい」のようになってしまいうんじゃないかと思うんですね。全国どこでも踊りがピシャッと決まるという。そういうことよりも、シマを思う気持ちだったり、集落のコミュニケーションだったり、そういったことのあり方の価値をもっともっと伝えながらやっていかないといかんのじゃないかなと思いつつながら、私たちはイベントやラジオで伝えているところです。



## 地域性と文化の在り方



地域規模	社会性	社会感	文化	目的
集落	共同社会	一元的	伝統文化	想い・考え
街	利益社会	二元的	芸術文化	技・型・質

図7

そこで、移動中にまた遊びでいろいろと考えてみました。集落と町があつて、島唄とポップスがあるとすれば、そこに先ほど挙げた代表的なアーティストたちを当てはめていくと、こうなるのではないかと思います（図8）。

元ちとせさんは集落に生まれて島唄を唄っていました。だから、ルーツといえばルーツポジションかもしれませんが、彼女たちはメジャーを目指し、そこから町に出て行ったわけです。で、ちとせちゃんがデビューした頃、中村瑞希ちゃんにもいろいろ内地からスカウトが来ました。「ちとせ姉ちゃんが頑張っているから、私は地元で歌います」と、彼女は20代前半の頃は言うておりました。彼女のような存在もあるなかで、中孝介くんは高校生の頃から町で島唄を歌い始める。同じように真吾も、まあ、浦上が街かどうかは分かりませんが、そういう真吾もいる。一方、カサリンチュは集落にいながら、ポップスを歌ってメジャーを目指す。で、瑞希ちゃんはそのままだ島唄を唄いながら鹿児島に行く。いまは楠田莉子ちゃんが集落にいながら島唄を唄い、さらにシンガーソングライターとしてポップスを歌って、これ

から内地へと行くさなかであります。なんかこういうことなのかなと思いつつ、真吾には築地俊造さんや坪山豊さんのように、新しい創作島唄を届けながら、集落の人たちもまたそれを歌い続けるということができたらいいのかな、と遊びながら考えてみました。

こういう構図の中では、子供たちの多くはずっとメジャー志向のまま物事を考えがちになるのではないかと思います。とくにルーツポジションの方には、それが大事だと言わない限りは、なかなか目を向けてくれないんじゃないか。まあ、どちらも大事だと思うんですけど。こういう価値観を伝えることが、ぼくたちメディアの役割なのかなという風に思っているところです。

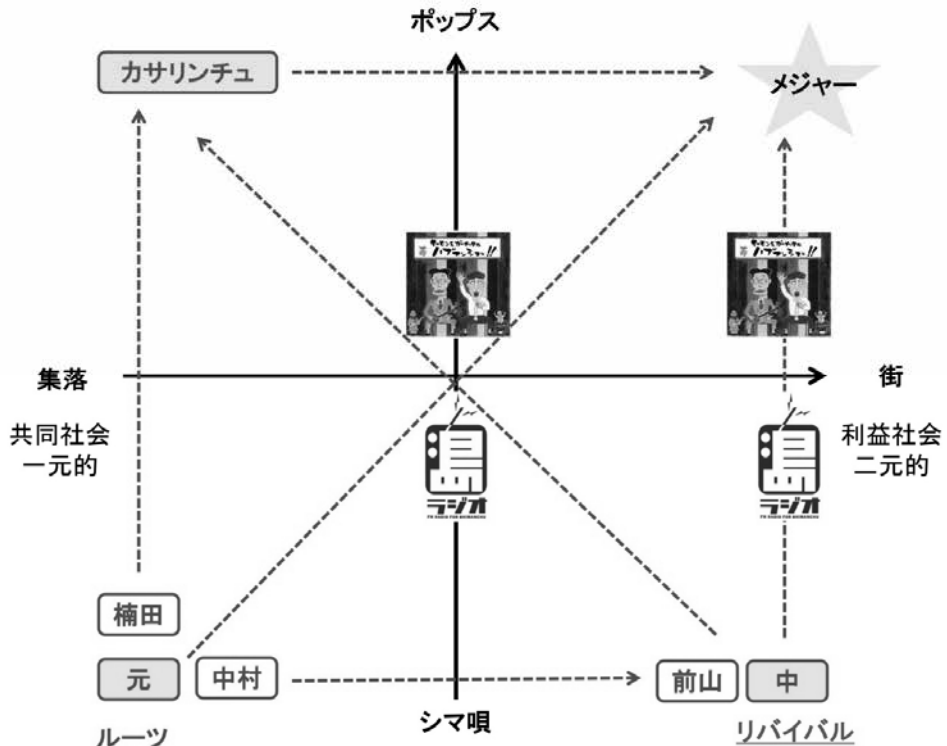


図8

もう最後ですけども、ありがたくも、今年3月に島は国立公園に指定されたところです。来年の世界自然遺産を目指して、これから歩いていくわけですけども、国内の世界自然遺産の中では生態系管理型、環境文化型と言われております、自然に対して畏敬の念を持ちながら島の人たちがそこに関わっていく。自分たちの食す分だけをとって、ありがたくいただく。そのなかで自然が再生され、育まれるという循環が行われていく。これは文化も同じなんじゃないかなという風に思います。ですから、同じように文化も育む環境も整えていかなければいけないのではないかと考えております。ちょっと理屈っぽく、堅くなっちゃいましたが、本当に島のものごとが、面白く、楽しく、カッコよく思えるように、どんどん伝えていきたいと思います。

私の子供たちも、「音楽をやれ」とはひとことも言ったことはないのですが、小学校一年生の娘が屋仁川にある「あまみFM」の事務所に週末に遊びに来たんですね。そうしたら、松

## Radio and the Singing Culture of Amami Oshima

山美枝子さんが経営している「吟亭」で、土日に島唄教室をやっているんですが、そこから子供たちの楽しそうな歌声が聞こえてきたんです。それで「島唄を習いたい」と言って、今年の4月から通っております。先々「歌手になりたい」なんて言わないことを祈りつつ、きちんと育んでいきたいなと思っています。

とりとめのない話ですが、音波、電波を使っている空気屋として、これからも島のものを伝えて、またムーブメントを起こせるように活動していきたいと思っております。以上でございます。